



写真で見る社会科

北方領土 択捉島を訪れる

近いけれど、とても遠い日本の島、そして日本人が誰も住んでいない島、北方領土。北方領土問題対策協会主催の北方四島交流教育関係者訪問事業（ビザなし訪問）に参加し、この夏に択捉島へ行くことができた。根室からの所要時間は船で約17時間ほどである。午前9時過ぎに出発し、途中の国後島（古釜布）ではロシアの警備隊員が私たちの船に乗船し、協会・外務省・内閣府の方々が入域の手続きを行った。時間にして30分程だった。手続き後、波の荒い国後水道を通り、午前2時過ぎに択捉島沖に到着した。雨天の中の航海だったが、到着したときには雨も上がり、北方領土近海特有の霧が立ちこめていた。

内岡湾に停泊し、陸地までは迎えの船で移動した。出迎えてくれたのはロシアの人々。迎えの車は日本車ばかり。紗那の町まで約15分。道路はまったく舗装されていない。町には集合住宅が多い。塗装が剥げた壁、あちこちに水たまりのある道路など、インフラ整備が不十分と感じた（写真①）。しかし、紗那の一部の地区では道路を整備し、住宅建築が急ピッチで進んでいる。ロシア政府がインフラ整備のために莫大な金額を投資しているからだ。

短い滞在時間の中で、地元の教員（8人）とわずか1時間だったが意見交換をすることができた。学校は小・中一緒の建物になっている（写真②）。①IT教育に力を入れているが、資金が不足している、②愛国心を土台

にした教育を意識して行っている、③サハリンの大学に進学後は、島に帰る人が少ないことが悩みであるなどの説明があった。私たちがロシアに抱いている印象や教科書教材の内容についてとても気にしているようだった。この場では、話題として領土問題は取り上げられなかった。「島はロシア領だ」という教育を長年行っていたため、いまさら何を…ということだろう。領土問題の存在は、ここ10年ほどで認識され始めたということで、私たちと意識の差が大きいことに気づかされる。今後さらなる対話を重ねて、共通理解をしていかなければと感じた。

上陸2日目は、別飛まで移動し船を接岸して上陸した。日本の船が接岸するのは初めてということだった。接岸した港には、大きな水産加工場がある（写真③）。ギドロストロイ社で、地域経済の中心企業である。1日に400tの加工が可能な工場らしいが、時間がなく見学ができなかった。給与が高いので大陸からも働きに来ているということだった。

私たちが離岸するとき、漁船から大きなオヒョウが次々に水揚げされていた（写真④）。島には水産加工場だけでなく、レアメタル開発の話や温泉施設があり、観光・水産・地下資源が豊富なことがわかっている。日本人のお墓、使っていた建物などの歴史上の遺物が残る択捉島。領土問題が解決し、自由に行き来できる日が待ち遠しいと感じた。（福島県公立中学校教諭）

写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。国内・海外で撮影された社会科の写真を、資料編集部「中学校社会科のしおり」係までお送りください。